
影しかない

せり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影しかない

【著者名】

ZZマーク

N6622M

【作者名】
せり

【あらすじ】 あえて無し・・・

～僕と周辺～ 1（前書き）

ポケダン的要素は薄いです。」
「承ぐだわい。

町を歩く・・・ゴミのように蹴り飛ばされる。

立ち上がり、歩く・・・泥をかけられる。

気にせず前に進む・・・誰もが僕を遠ざける。

店の前に立つ・・・店が閉まる、まだ曇るのに。

こんなの慣れっこだった。何せもう一年もこりだ。

悪タイプ差別・・・かつてこの世界を覆いポケモン達を苦しめた闇の勢力は全てが悪タイプのポケモンで構成されていた。首領が倒され、事件が解決し平和な世界になったが、事の犯人達である悪タイプのポケモン達は忌み嫌われ、悪意のない者達ですら必要以上の

仕打ちをつけた。

そして僕も・・・『ブラックキー』という悪タイプである種族だ。食べ物は手に入らない、住む場所もない、友達なんてそこら辺を見渡したつているわけではない、親はもういない、兄弟がいたけど、自分のせいで兄や姉、弟に妹までこんな目にあつてほしくないと思いつかとこの場から立ち去りつとする。

「セーにいちゃん！」

「にいちゃん！」

町をはずれポケモン達の姿が見えなくなると同時にそいつも僕に追いついてきた。

そいつは僕の弟だ、末っ子で親が名前をつける前に死んでしまったから名前がない。イーブイなのだが所属の中でも特別小さいから『チイ』と呼んでいる。

「あのね、チイ・・・

懲りないやつに僕は言つてやる

「チイも知つてゐるだろ？僕は悪タイプだから周りからは差別される。そんな僕の近くにいて、普通に話しかけてたらみんなはお前のことをびづく思つ？」

なるべく優しめの声でそう言つてやつた、チイは形は小さいが結構我が強い、命令などしても聞かないだろ？。とか思つていると返事が返ってきた。

「そんなの知らないよ。」

僕は今までに何度も忠告した、そのたびにコイツはいつも言つてきたのだ。僕としては凄くうれしい、涙が出そうだ、いやもう抱きついてやりたいぐらいだ・・・しかしこんな事が続いたらいはずれはチイも周りから避けられるだろ？。

今僕を見ているその田は真剣だった。こっちも真剣だ・・・うむ、にらめっこだが・・・僕とにらめっこをしたやつはだいたい種族上笑うではなくどうしても怖がつてしまふんだが「コイツだけはどうも目で征することができない。困ったものだ・・・

「今日はお知らせがあるよ。」

いきなり切り出してきた。

「明後日がリーアねえちゃんの誕生日だよ。カチョウに伝えておいてくれつて言われたんだ。」

知つている・・・僕がリーアの誕生日を忘れるはずがない。誕生日どころか好物から趣味までリーアのことなら全て知つてる！リーアというのは僕の妹・・・世界で一番大切な妹。それがもうかわいくてかわいくて、最近『リーフィア』になつてさらにかわいくてもう、え！？天使ですか？「みたいな。あの少し虚ろな目、少し皮肉っぽい口調・・・抱きついた時のフカフカ感が・・・

「気持ち悪いよ・・・それ完全に変態行為だよ。」

驚いた！「まさかチイ・・・読心術を！？」

末恐ろしくなり問うてみると答えは簡単

「声に出てたし・・・」

ん？・・・ウソ・・・ああやつてしまつた。弟の追い打ちは酷いものだった。

「その様子だと声に出る前も色々と変な」と考へてたんだね、このシスコン野郎！今度リーアねぇちやんに言つてやる！

「これーど」でそんな言葉を覚えた！というか、

「それだけはやめてくれ、リーアに嫌われたら僕は生きてこけない、地獄へダイブだ。」

僕の言葉を聞きチィはーヤーヤしながら次は句を言つてやるひつかと考へてる、イヤミなやつだ。

「あれー悪タイプのポケモンだー」

さてさて明るい口調があからさまにからかう気満々しかも悪性の声が届いてきた。いきなり来るものだから反応できなかつたぞ・・・そして姿を現すそいつ・・・ら

「そこのおチビちゃん、何を楽ししそうに話してるんだい？」

「うわ～気持ちわる・・・」

3匹・・・ふむ、一般的にさういふ状況へ向かうについたら、たいていいじめっ子キャラだ、小僧のガキンちょであるとせらうそれらしいが・・・そこいらはまるつきり一般のいじめっ子キャラ

ではなかつた。いや既に『子』ではないし事が『いじめ』で済むとも思えない。

種族は『カイリュー』に『ボーマンダ』、『ガブリアス』と盛大なドラゴン祭り。

「何でこんな所にいるんだよマジ迷惑だし・・・」

「どつか消えてくんない?」

「つーか気持ちわる・・・」

そいつらは口々に言ひだした。僕は気にしないが・・・さあ言われたとおり退散だ、チイとの関係はこれ以降目撃されなければ大丈夫だろうから放つておこう・・・と

「セーにいちやんに謝れ!」

やりやがつた・・・僕の背後で起こつてゐ事がみるみるうちに脳内に広がつてゆく・・・

「にいちゃん?そこの悪がおチビちゃんの兄だつて?..」

想像と一致・・・何奴が言つたかは伏せておくとしてドスの利いた声だつた。

「おい・・・おい『冗談はよしてくれ。』

想像と不一致・・・意味が分からぬが僕が2~3日水を一滴も飲まなかつたらああいう声になるだろ?。

「お前も悪の血が流れてるつてことか・・・気持ち悪

3人目・・・ドンマイ、ゲームオーバーだ。その拒否感がものすく出でる声、面白いね。

「君達・・・僕を散々に言ひてくれるるのは構わない。」

振り返り、そのまま中央にいるカイリューに向ける、若干驚いたのだろう。そいつらはにやけ面をゆがませた。元々ゆがんでるのに器用なものだ。チイも驚きの表情、

「ただし、僕に関わる事で身内が変な扱いを受けるようなら許さない……」

まあこの後の奴らの反応も予測してみよう。

「悪タイプの分際で何言つてんだ？」

一致・・・驚いてはいたようだが恐れたわけではないようだ。
この後にも続くかと思ったがそれはないようだ。ではこちらのターン

「ただ君達のことを記憶しておくなんてめんどくせだから、今罰してこのことは綺麗に流しておいてあげるよ」

「お前みたいなやつが俺たちドラゴンに敵うわけねえーだろ、ハハ！逆にぶつ潰してやるよ」

一致・・・言うが速いかそいつらは僕めがけて技を放とうとした。
・・・・・そいつらは倒れてる。

「セーにいちゃん・・・なんか光った？」

光らせた。僕が『光玉』を使つたんだ。光玉は3秒ほど辺りに強い光を放つ。

「光がまぶしかつたからそいつら氣絶したんだろ」

「やう言つてやるとチイは「へへ」と納得したようだ。地面にのびてゐるそいつらは・・・うん、かなり苦しそうにもだえている。僕の言つた「まぶしかつたから氣絶」がウソだつたらあり得る光景だ。無数にあるそいつらの切り傷やらアザに氣が付いたチイが寄つてくる。

「せっぱつこいちゃん何かしたでしょ」

「いや・・・そこつらはすつじくまぶしかつたんだ」
適当に這つくるめてやるとチイは頬を膨らませ僕に軽く前足をぶつけた。

実のところ、光の中ではあいつらを殴らせてもらつた。切り傷は僕オリジナルの『鎌鼬』でつけたもの・・・自分が戦う姿など誰にも見られたくないからね、光玉のフラッシュが持続する時間だけで終わらせたいし。

「それよりもチイ」

呼びかけるとチイが期待の目を寄せ、一體何に期待をしているのだろう？

「分かつたら、僕と関わつてたらわざみみたいな事になるんだ

」
そう言つてみると、すねたよつて

「だからなに？」

とぶつせりぬり言ひ返してきただ。

僕はまだ、悪タイプ差別の真相など知らなかつた・・・

「僕と周辺」1（後書き）

情景描写がかなり下手ですが、以後お見知りおきを・・・

木々に囲まれ誰にも見つからずにここまで来た今日この頃、『こ』とは僕の実家に行き着くには通らなければならない茂みの中だ。伏せたまま辺りを確認・・・誰もない、うむ、よし。見つかれば追放されるだろうからね。

結局、昨日はあの後何もなくチィと別れだし、町で目的のものを手に入れることもできなく野宿となつた。町で購入予定だったものは・・・すばり、プレゼント！

リーアの誕生日だから何かを渡してやるひつと思つたわけだけど・・・追い返された。僕としてはこれ以上悪タイプが悪者のように思われるのは嫌だからね、強盗なんてしない。

それよりもリーアの誕生日、明日だが・・・どうしたものか。きっと他の奴らなんか構えてるよな。僕だけ何もないようだつたら「リーアに嫌われてしまつ・・・いや〜リーア、かわいいよりーア。こんな事考えている僕つてかなり危ないな、そろそろ外科手術が必要だろう。どのみちリーアはかわいい・・・あの静けさがなんといふか・・・

「変態、何考えてんだよ。手術なんてもう手遅れだ。
「うあ！？」

あまりの唐突さに変な声が出た、音の方向を見るとなんと真正面、なんで気が付かなかつたんだろう。

「お前声に出してそんなこと言つてて恥ずかしくないか？」

けいべつの眼差しで僕に言葉を投げかける。どうやらまた想像がそのまま言葉になつてたようだ・・・気をつけないと。

そりそろ紹介してやるひさしきからじからに話しかけてる奴は、

「よう・・・バーベキュー」

「なんだそりや？」

ずつこけた。簡単に説明してやると、僕の唯一無二の悪タイプ以外の友達であり『マグマラシ』なのだがバトルとかの実力的には進化系『バクフーン』をも凌駕するだろう欠点としては趣味の悪さ。『バーベキュー』とは今考えたあだ名である。

「いやね、バーベキューというのは僕のお気に入りの小説、『人類』っていうSFもので登場する『人間』ってエイリアン的なものが好んで食べる・・・料理名だつたかな？いや食材だつただろ？まあそんなものだ」

ちなみにこの小説には『アーリキーみたいなかんじの変なのが描いてある挿絵とかが入つてて作者はノンフィクションだ！』と言い張っているが、小さな鉄球を音速を超える速さで撃ち出す装置とか非現実的なものが出てくるし、どう考へてもSFだ。

「で、なぜ急にあだ名なんかつけんだよ」

『バーベキュー』とはなかなか不可解だつたんだろう・・・そう睨むなつてば

「昨日辺りからかな？なにか僕の心の中が覗かれてる感覚があるんだ、僕自身心の中では何も知らない者に何か説明してる口調だし」

「あ？・・・まあいいや、それはいい、たいした問題じやないだろうからな。だがお前なんかお困りのようで？」

別に困った顔をしていたつもりはないが、そう真剣に聞かれるとな
なにか適当に言つてやる。

「光玉が戻きた、仕入れてきてくれ」

「・・・オレよお、思つんだがお前強いぜ、わざわざあんな四つぶ
し使わなくても喧嘩でお前が負けるかよ?」

「ああ、自分で思うのはおかしいが確かに僕は強い、昨日のデカブ
ツだってまともにやつても結果は同じだつただりう、だけど

「僕は他人に自分の戦いを見せたくない、見られたくない、見られ
ると氣味が悪い。だから光玉は必須だよ」

「ん~・・・確かに、お前の戦いとか見た田には、トラウマになる
な」

「バーベキューは四足歩行のくせに一本足で立ち、前足を僕に向け
てにやける。」

「お前つてめつちやくちゃく殴るよな、とにかく殴るよな」

「そう、バーベキューは僕の戦闘を見たことのある唯一精神がイカ
しなかつたやつだ。コイツ以外には刺激が強すぎるだろう、あまり
見るものじゃない・・・つてこの野郎まだ口を開いて・・・」

「あと、すんげーのが鎌鼬ね、お前のあれ、あれがよつ、おつどろ
きのなんのつて、触れたと思つたらスパッと斬れちゃつて怖いよ
な、ていうか殴りすぎなんだよマジで・・・」

そんなんに言つかな、僕は意識を残さない程度にすませてるつもりなんだけど、

「ほんじゅまあ行つてくる、金はもあらんあるよな、それなりにもりつかり、じやな。」

「ばいばいバーべキュー。」

バーべキューの奴はさつさとどりかへ行つてしまつた。金つて・・・
・ 金金金あつたかな? それはいいが、このほふく姿勢のまま家まで
行き着くには・・・ああ、今日も野宿か・・・いやまた、おかしい、
実におかしい。

この森は名前なんて無いがかなりのポケモン達が住処としている、
それなのにこの静けさは・・・でも誰もいないのは都合が良い、こ
のまま歩いていけば日没までになんとかつくだらう。

しばらく歩いた

「う・・・ううう・・・」

何か居た、忍び寄つてみる。

「う・・・」

泣いてる、じぢりに気がついていないようだが地面に膝をつい
て両手を頭に・・・泣いているのだろう。サーナイトというポケモ
ンだったかな? ふむ、声からして女性だな。

普段の僕ならば放つておいたらどうでも今泣いている彼女は好

みのタイプだ。大人びていて身長が高めだからね、そうなれば、困つているようだし助けてあげよ。

「どうしたんですか？」

声をかけると返つてくるのは当然返事だ。

「森のみんなが・・・連れ去られて・・・」

彼女は顔をあげない。

「貴方は? どなたですか?」

相手の顔を見もせずに名前を尋ねるなんて、もし尋ねた先が知り合いだつたらその知り合いは泣くだろうね。

「名前は・・・名乗らないでおく、あんまり歓迎される奴じゃないので。なんと呼べばいいです。」

「お願ひします!」

彼女は僕に頭を下げる、もともと下がつてるが下げる。一度も僕を見ない。

「みんなを、森のみんなを助けてください。」

・・・めんどうなそうだ、というよりこのサーナイトさんなんだ
こんななんだ、相手を見ずに会話して状況もろくに説明せず、見ず
知らずの名前を名乗らない絶対不審者に頼み事つて、しかも森にいたポケモン達が連れ去られる・・・森が静かな訳は解つたがなんで

連れ去られるんだよ。かなりの数だと思うんだけど・・・
どうしよう、綺麗なお姉さんを助けてあげるかそれとも見て接触
してなお見ぬふりするか・・・

なんだか視線を感じるな、サーナイトさんのものじゃないけど・・・
・僕の思考が見られてる気がする、さっきからいや昨日から、なん
でだろう、僕はこのサーナイトさんを助けて事件に巻き込まれない
といけない気がする。バーべキューはたいした問題じゃないとかい
つてたけど結構痛い視線・・・僕って事件に巻き込まれることを期
待されてる？

そういうことなら・・・仕方がない、お姉さん綺麗だし。

「僕が、事件を解決します」

「高々と宣言。

「本当にですか！・・・ようしくお願ひします。」

僕ついいい奴かもしない。

さてさて事情を聞いてポケモン達を連れ去った数十匹のポケモン
達がどこへ行つたかを聞いた僕はありがちな洞窟の入り口まで来た
わけだが・・・とうとうサーナイトさん僕を一回も見なかつたな、
まあ見ればこんなこと頼む以前に逃げ出したかもしれないけど。
なるべく穩便に済ませたいがため、かといって森のポケモン達ほ
とんどを連れ去るほど不可思議でむちやくちやな連中だ、話し合い
など通じるわけがない。強行突破は・・・だから穩便にすませたい
つてば・・・潜入開始つと

「よう、詐欺師」

「間が悪いやつめ・・・」

詐欺師とは前述したSF小説『人類』に出てくるある登場人物の内の一人の職業・・・だったかな?いや、たしかそいつの名前、じやなくて好きな食べ物だった様な気が・・・まあとにかくその人物と僕の正確が似ているからと言つてとある友達が僕のことを詐欺師と呼び始めたのがきっかけで僕の背後に現れた奴もそう呼ぶ。

「あ?・・・まあいいや、それはいい、それよりも光玉仕入れてき
たぜ」

突然再登場したバーべキューは、「ほりよ」と光玉を三つ投げ渡す。

「えらく速かつたな」

「ああ、町まで行くのはめんどくせえ」

そいつはとても黒く笑った。

「盗つてきた」

「そつかい」

別に何でもよかつたが、こいつは悪いと自覚していくやつているのだから質が悪い。どこから盗つたかは知らないけど、これでもしもの時の逃走手段ができた。

「金は今度でいい、」のメモに書いてある額用意しきな

バーベキューが差し出したメモを手に取る・・・〔冗談じゃねえ！
桁間違つてゐるぞ三桁ぐらい。〕

「おこバーベキュー、これはほんの辺に小数点を打てばいいのか？」

「ああ、一番右端になら付けても構わない」

「それじゃ意味がないんだよ」

「それよつなにやつてんだ？」

「古の鑑賞だ」

「嘘付け、女つたらし、ほまつてゐ好みのお姉さん見つけたからつ
てよりによつてお前がこんなことするとはな」

「ばれてるし、

「まあやつていいけど、手伝つてくれ、一回じやなにもできやつこ
ない」

「さつき渡したメモにおかしくなりなによつてだけを付け足しと
いてくれ、そうすりやつしてやる

「わるやつてやる」

奴の要求はつまりいつだ、一桁増やせど、もとよつ半端無い値だ
つたから一桁増えただけでも大違い、借金だな。

まあこれで、なんとかなりそつた氣はしてきた。理由が正当であ

るかどうかはたいした問題じゃない、動機はいつも不純だ。

～僕と周辺～ 3（前書き）

何を言っているのか解らない文字軍を投稿

バーべキューを連れていたのは間違いだつた。

「ヒヤハハハ！」

笑い声、それもイカれたものだ。声の主、バーべキューは戦闘狂だ、普段は比較的まともな人格なのだが、一度戦いが始まると豹変し、狂つてしまふ奴・・・すっかり忘れていた。

「おらあ、燃えちまえ燃えちまえ！」

「バーべキュー止まれ・・・」

軽く言つてやる。

「ハデにいつてやんぜええ！」

「オイ！止まれ！！」

強く言つてやつた。

「全力で来やがれ！でねえと焼けるぞお！」

「やめなさい！」

軽く叩いてやつた。

「もつとかかってこいや！」

「ヤメロー！」

蹴り飛ばしてやつた。バーべキューは吹っ飛んで洞窟の壁に埋まり込む、そこで石像になついてくれ。

今の状況をお伝えしよう。僕たちは意氣込んで敵のアジトとして

はありがちな洞窟に忍び込んでいたはずだったのだが……このどうしようもないやつが怪しげなポケモンを見つけたとたんにドハデに炎をぶちかましやがった。すると奥からわんさか湧いてくるのは当然非友好的な奴らで、招かれざる客と判断し攻撃をしかけてきた。僕は逃げようと思つたんだけど今そこににある壁の彫刻と化している奴は大喜び、「久しぶりに暴れてやるぜ！」とか言ってから湧いてくるポケモン達に突撃していつたと……何が「久しぶり」だ、あいつ常に暴れっぱなしなのに。

「逃がすな、追え！」

わらわらと湧いてくる数十もの好戦的なポケモン達が僕の方へ突進。僕の選択肢は当然……

逃げる！！

元来た道へダッシュ！あんな大勢相手にしてたら絶対疲れる。疲れるのは嫌いだ、疲れたらしんどい、しんどいことしたら疲れる疲れたら動けなくなる、でも逃げるのも疲れる、疲れたらしんどいしんどいしんどいしんどいしんどいしんどい。

「あ～もうひっそりられない……」

ポケモン達の足音やら声やら様々な騒音がうるさい……ひるといのは嫌いだ。

僕はバーベキューにもらつたばかりの光玉を取り出す、コイツの用途といえば結構限られていく。その少ない用途が現状の打開にぴつたり。

透き通つた白の球体を取り扱い説明書に乗つ取つて使う（そんなものはないけどね）光玉を使つたときの耳にあまり優しくない音と

目に凄く悪影響がある光が洞窟全体に広がる、音と光に耐えられなかつたポケモン達が倒れていく。僕は目も耳も塞いでいるからその影響は受けないけどね。

「目が・・目があああ！」

「ああ・・・目が、目が・・・」

意識は保つていた連中もただでは済まなかつたのかな？なんか聞いたことのあるテンポだな・・・まあいいや。その隙に逃げる、出口へ向けて一直線、もつともこの洞窟は結構入り組んでいるから一直線とはいかないけど。バーベキューは・・・うん、放つておこう。多分大丈夫だろ？

しかし、一体全体あのポケモン達は何をやつていたんだろう？僕の見た限りでは全員森にいたポケモン達なんだけど・・・何故追われる？救出しようとしたのに・・・ん？待てよ・・・いや、別に待たなくとも良い、なぜか考え方をするときは「待てよ」と言つ。なぜだらう？便利だから、待てと言えば相手は待つてくれる、自分のために相手が時間を無駄に消費してくれる・・・ありがたい。じやなくて、さらわれたポケモン達が相手なら助けに来たことを伝えたら追われないどころか依頼達成だ、そうに違いない。なんでこんなことにもつと早く気がつかなかつたのだろう？

というわけで、もうすぐ出口といつて戻る・・・せつま光玉を使ったあたりまで戻ってきた。

どうせ話しかけるなら美しい方にしよう。ちょうど『キレイハナ』さんが近くに倒れている・・・失礼、ちょっと起きてくれさい。

「ん？・・・」

期待通りのかわいらしき声が聞こえた。

「いきなりで悪いですが、僕はサーナイトさんに頼まれて連れ去られたあなた達を助けにきました。」

「・・・ええ？」

普通の疑問ではない・・・僕の期待したクエスチョンは「助けに来てくれたの?」という意味合いがこもった返答だったのだが、うわずつたその疑問は明らかにおかしな奴相手に非難を示すものだった。

「連れ去られるとかそんなのないんですけど・・・

まさかの連れ去られてない宣言。

「私達はここでサーナイト姫のお誕生日祝いの準備をしていただけなんですけど・・・」

・・・オイ、ちょっと待てい。あのサーナイトさん姫ですか・・・
ちょっと姫さん、なんなんですか?勘違いですか?質悪いですよ。
なんでそれなりに意気込んでこんな洞窟へ来なきやいかなかつたん
ですか?バーベキューの事もあるしこれじやただの通り魔じやない
ですか。

そして僕に追い打ちが降りかかる。

「つて、貴方よく見たら悪タイプじゃない!・・・近寄らないで、
あっちいってよ!」

そして、キレイハナさんはどうかへ行つた・・・。すがに傷ついた。僕はよく見なくても全身黒だし、全身黒で悪タイプじゃないなんてそういう居ないだろうし僕はもうなんか凄い思いこみしてたし・・・やだなあ、なんだか自殺したくなつてきたじやないか・・・尖つた筋はないかな?あつたら頭突きして碎いてやるのに・・・さあ碎けるのはどうちだらう?僕かな?それとも筋だらうか?やる気しねえ・・・おお、ちょうどよさそうな筋がある。どうかで見たような形だな・・・この筋で死ぬとま、運命を感じる。じゃあね、僕の思考をのぞき見している者達よ・・・

僕はその筋に頭から突撃

「いっつえええええ!」

僕は死んでない、僕は痛くない、僕は別に叫んでない。死ぬとき叫ぶのはダサイからだ。筋から声、筋は普通喋らない、叫ばない、苦しみもだえたりしない。筋は、筋は、筋は・・・

「なんだ、バーベキューか・・・」

完全に筋と一緒に化していたそいつは砂埃を払いながら立ち上がる。

「なんだとは何だ・・・腰痛え

バーベキュー、僕が付けたあだ名だ、なんか呼びにくいな・・・

「おいバーベキュー

「なんだ?」

「なんだとは何だ

「意味が違う!用件はなんだ?」

「お前な、呼びづらー、」これから『セキゾウ』って名乗れ

石像のセキゾウ・・・いいじゃないか、一文字減っただけでも大
違いだ。元バーべキュー、もといセキゾウが僕を半開きの目で睨ん
だ・・・ちょっと怖い

「お前な・・・もつぢりひもこせ

ふつ、あきらめたか。コイツをからかうのは面白く。

「言わなければ傍観者達には解らなかつたのに・・・

「は?」

「何でもない」

そう、僕は無表情だ、いつでも、どんな時でも、そりゃさつきセ
キゾウに突撃する際だって無表情だ。セキゾウは僕常に無表情が怖
いと日頃から言つていた、この際それをやめてもらいたいのだろう。

でも、

「僕は内面ができるだけ自分以外の奴には見せたくないんでね、こ
れだけは譲れない」

そうですかい、とビリビリもよせ氣な態度のセキゾウ、

「わー、やあそろ帰るわ」

「もつ・・・帰るのか？」
試しに寂しそうな表情をつくりて言つてみた。

「気持ち悪いからやめろ…」

本当に気持ち悪そうだ。

「だらう、だから言つたんだ」

普段無表情な奴がいきなり感情を表したりするようになつたらかなりイメージが崩壊するんだろうな、僕はセキゾウから気持ち悪いと評された表情を消して無表情に戻る。

「今度一回じやな。また会えると・・・いいんだけどな？」

「お前とほ一度と会いたくないな、ややこしくて仕方がない

「じゃあもう会わねえよ。」

セキゾウは僕に背を向けて右手を2～3回だらしなく振ると一足歩行のまま出口へと向かった。僕も道は一緒なんだけどしばらく間を開けて行こう、この後即また会つたらなんか締まらないから。

「どうか、なんなんだよ今日は。酷すぎる、僕がせつかく綺麗なサーナイトさんのために森の住人を助けようとしたのに・・・そのポケモン達は実はどちらえられていてる訳じやなく、サーナイトさんに秘密で誕生祝いの準備中。サーナイトさんが連れ去られたと勘違いしたのは多分作業をサボっているポケモンを他のポケモンが連れ戻しているところを見たんだろうな・・・僕つて救いようがない？ああ、あの時本当に死んでおくんだった

「死んでも誰も悲しまないだろうな・・・」

別にどうでも良いことを呟いてみた。家族思いの力チヨウがどうだろう・・・末っ子でやたらと僕になつてゐるチイはどうだひう・・・リーアは？リーアは僕が死んだら悲しんでくれるかな・・・どうだろう？

「戯あざれがましいだけだけど・・・」

そりそろいいだろう、セキゾウもどこか遠くへ行つただろう。

僕は結局すゞい邪魔をしてそのまま謝罪無しでそこから立ち去る事となつた。

帰り道、ちょっと見かけたサーナイトさんは、さも幸せそうに洞窟へ駆けて行つていた・・・誤解が解けたんだひう、苛立たしい。結局全て無駄無駄無駄、こんなことならリーアにきのみでも持つて行つてやるんだった。

仕方がない、今からでも家に帰らう・・・僕は走る、体にあたる空気が心地よかつたら救いようがあつたのに、空気はぬるい、でも今日中に家に着いておかないとリーアの誕生日に間に合わない。

全力で走つたら夕方には行けるかな？ああ、でも全力で走るとすぐ疲れる、やだなあ・・・それでもだとしてあんなこんなで嫌なことがあれば走ればいいじゃん、男なら走れ、走り抜けろ！

「そんなの知らねえよ」

～僕と周辺～3（後書き）

□

『 の用途がイマイチ解らないです。』

一般には、睡眠中に時々夢を見るらしい。楽しい夢、悲しい夢、あり得ない事が起る夢、そして怖い夢とか。

それはなかなか回避できないもので、夢の内容は自分で決めたりなんてできない。しかし僕は夢を見たことがない、楽しい夢も怖い夢も。

そのことをセキゾウ（元バーベキュー）に話してみたら、「そりや夢がなさそうだもんな」と笑い飛ばされた。結構前、僕がまだ小さかったころだったからそうなのかと本気で思っていたけど。本当にそうかもしれない可能性は否定できないけど・・・

今朝もまた、僕は夢を見られなかつた否、見る気などなかつたまあとにかく、夢をみない、夢がない、そういう僕は通常の世からすれば異端だつた……

異端、これ以上なく外れたもの

「おはよー、カチコチ」
「ああ、おはよー」

名前だけ出てきていた、いや名前と認識して頂いていただろうか。『力チヨウ』とは僕の兄でこの家族の長男だ。本名ではなく僕専用の呼び方、親が居ないから家長つてわけ、チイも真似しているんだけどね。力チヨウの種族は『ブースター』、あまりさわりたくない体温を持つ・・・かなり熱いからね。力チヨウはパーティーの準備中、色とりどりのきのみを板に乗せて器用に頭で運んでいた。パーティーとはリーアの誕生パーティーのこと、昨日僕は結局走り続けてなんとかここ、僕の実家に到着した。

「セル、まだ大量にあるんだ、運ぶのを手伝ってくれ
「了解」

『セル』とは僕のことだ、愛称だけどね。別に特別な名前つて訳じゃないんだけど知らなくつたつて良いじゃないか、名前ぐらい。

僕は山積みになつてゐるきのみ群から適当なものを選ぶ、リーアの好きなきのみはどれだつたかな？・・・

僕の家族は僕を入れて10匹、他界したのを除けば7匹と多いからきのみは大量に必要となつてくる。

「久しぶりじゃないかよ、セル」

きのみを選別している僕の背中に軽い衝撃が加わる。僕の背に前足を置くそいつは『サンダース』、僕の兄で僕からの敬意を込めた呼び方は『デンチ』……いやね、小説『人類』にあるんだよ、電池つていう電気をためておくのだつたけ？電撃を発射するものだつたかな……いや、投げつけたら爆発するやつだ、そうに違いない、その電池が由来。ちつとも敬意なんかこもつてないけど

「デンチ、暇だったら手伝つてほしい」

「お前の仕事じゃないかよ、俺は忙しいんだよ

絶対忙しくなんかないだろ？」・・・デンチは逃げるよ／＼に僕の視界から消えた。

黙々と作業を続ける僕はなかなか絵になつていてる気がする。・・・一つ、二つ、三つ・・・あれ？選んでるのはこいつだ、どうやつて運ぶんだ？・・・カチョウは？カチョウはどうやつていた？・・・分からぬ。僕は種族上、四足歩行だ。手に持つことはできない・・・どうすれば？

「セーニングちゃん」

弟のチイだった。

「もうきのみいらなこよ・・・

「・・・せうか」

チイはそれだけ伝えるとひきつり行つてしまつ・・・僕はいつたい何をしていたのだろう。

さてさていくら家族でも僕に友好的な奴らだけではないところを理解してもらおう。

だるそうに歩いている薄紫を発見した。

「ああ、お前か・・・しばらく見なかつたな、てつきり死んだものかと思つてた」

「僕は死にたいよ・・・」

僕の双子の姉、『エーフィ』の『名無し』である、名前を教えてくれないため名無し、ついでに、なんだけど素つ氣ない、僕に会うたびに嫌みなことをほざいてくるから僕は苦手だ。本当に死にたくなる・・・こんな奴は適当にあしらって、次いつてみよつ・・・

「お姉様、おはようございます・・・」

「つむ、よし」

またまた僕の姉、『シャワーズ』の『お姉様』、何故僕がらしくもなくお姉様なんて言つているかといつと、「年上を敬え・・・とか言われたからね、仕方なくこうなつてる・・・また変に厳しいお方なんだから・・・え？・・・名前はつて・・・個人情報だ、それは本人の了承なしじゃあ明かせないな。

「なにか困つたことは無いか？」

「いえ・・・ああ、チイには外出時に僕に会わないように言つておいてください」

「何故自分で言わない？」

しつかりしていいそうで実は家では一日中寝ていたり……動かない方だが同時に5日に一度ちょっと食べるぐらいで最小限の食べものだけで過ごしているからかなりやせている……やせた運動不足つてけっこう珍しい氣もするな。

「僕が言つても聞いてくれませんよ」

チイは近頃反抗期と見た。

あと挨拶してないのは……リーアだけだ。

リーアは庭にいた、しゃがんで植えてある花を斬殺していくところだった……って怖っ！

「あっ、お兄ちゃん、おはよい」「わこます」

カワイイ……礼儀的挨拶であり笑顔だとではないんだけどそれがリーアらしい……ってやつぱり怖い、リーアは再び作業に戻つた。

「リーア、何してるんだい？」

「生命を奪つてます」

「な……何故？」
なごえ

「暇つぶしです。私のために皆さんがパーティを開いてくれるということで、名無し姉さんより待つていろと言わされました」

「この娘には同類を痛めているといつことか分かつていかないんだろうか？」リーアは『リーフィア』という種族でありくさタイプのはずなんだけど……まあかわいらしきしいいや、なんだかこの「横顔」が見ていて癒されるというか、久しぶりに見たリーアはなんだからに可愛くなつたな、今すぐ抱きつきたい！！！！

「貴方殺しますよ……」

「え！？」

いきなり尖つた声が飛んできた。

「先程から何を言つているのですか？ 気味が悪いです」

まさか……思考が読まれた！ つて言つた霧囲気が……目が……
・目が！ …完全に笑つてない

「そんな大きな声が聞こえないとでも？」

またやつてしまつたのか……口が軽い……じゃないか、この場合。リーアは怒つていた、表情がない……いや、目だけはナイフのように尖つている……でも、

「そういうところがカワイイんだ」

「死んでください」

リーフブレードが飛んできた……避けられなかつた……ふれるだけで斬れてしまいそうな葉^刃が目の前に広がる、否……にはもう写つていなくて痛みが、肉が避ける痛みがはしつた……僕は死んだかな？

静かだ・・・目が覚めるとそこはさつきと同じ、違うところと言えば、リーアがいなくて庭の花が全てバラバラになっていて、僕が寝ていた場所半径約一メートルぐらいが血だまりになっていたってことかな？

「セーにこちゃんやつと起きた」

別にこんな事は珍しい事じゃなかつた、僕が血だらけで倒れていることなんかもうみんな慣れてしまつていて。しかし今日はかなり傷が深かつたな・・・すつごい眩がする・・・貧血だ。チイは何も気遣つてくれなかつた・・・傷がある前右足の付け根が痛いと目で伝えてみたが・・・

「・・・？」
「うういいや・・・

パーティはどうなつたのかな？ やけに静かだけど・・・まだ始まつていなか、もしかして僕を待つてる？ いやありがたいな、世から拒絕されつづある僕だけさすがに家族は違う、いいねえ家族。

「チイ、そろそろ僕は大丈夫だ、パーティの用意はできるる?」

「……」

冷めた視線が・・・飛んできた……

「もう終わってるよ……」

マジっすか・・・あらう・・・密かに僕を待つていてくれるであろう事を願っていたのがばかばかしい・・・」めんリーア、謝つておくよ。

残念だつたけど、まあいいや。もう寝てから明日仕事場に戻るつ

……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6622m/>

影しかない

2011年10月7日05時20分発行